

さまざまの出会い

高橋健一著

さまざまの

高橋健二著

木耳社刊

高橋健二

1902年、東京に生れる。
東大独文科卒。中央大学教授を経て、
現在、日本芸術院会員、日本ペンクラブ理事。『ヘッセ・危機の詩人』
『グリム兄弟』など著訳書多数。

さまざまの出会い 定価一八〇〇円

昭和五十一年十二月五日第一刷発行
昭和五十二年五月二十日第二刷発行

著者 高橋健二

発行者 田中嘉次

印刷 浩文社

製本 加瀬製本

発行所 木耳社

〒一〇一

東京都千代田区内神田一ノ十二ノ十

振替・東京3・五一二二
電話・東京(二九一)〇八四六

検印省略

目次

I

タカハスキー氏	9
ヒトラーに毒をもらなかつた女性	11
ナポリのすりとチヨコレート	14
ヴァイマルのコーカサス人	18
トーマス・マン訪問の思い出	21
ヘッセを訪ねた日	25
スイスのコイのぼり	29
スイスの温泉で	32
スイス人のけち哲学	35
シュピッテラーの生地へ	38
ヘッセの足跡を訪ねて	41

ローマのゲーテ博物館 48

フランクフルト——ハイデルベルク 51

私のライン下り 54

回想のドレスデン 62

シーボルトの町との姉妹都市 64

会議は踊るシェーンブルン宮 66

ヴァイマル今昔 69

ただ乗りの弁 82

II

ゲーテと天才少女クララ 87

ゲーテと美女ハミルトン 90

ゲーテとナポレオン 93

シュピーリの場合 100

カール・マイのこと 103

キージンガー首相のこと 107

体験的ケストナー紹介 110

文学者の誤り 116

ヘルマン・ヘッセ展に寄せて 123

画家としてのヘッセ 126

余技の効用 141

ドイツ文学十二か月 145

1、マルティン・ルター 2、レッシング

3、ゲーテ 4、シラー 5、グリム兄弟

6、ハイネ 7、ケラー 8、ニーチエ

9、ハウプトマン 10、トーマス・マン

11、ヘルマン・ヘッセ 12、ケストナー

III

雑談・山本有三	185
文学老青年・山本有三	189
小説家・山本有三誕生	192
山本さんの将棋盤	195
『米百俵』復活	198
有三と寛の懸賞応募	201
優柔果断の川端さん	203
川端さんとペンクラブ	206
伊藤整さんとのつながり	212
“両極”の人物	217
にもかかわらず	219
岩元先生訪問記	222

生活の知恵 225

お隣为天野貞祐先生 228

天無情——山田九段にささげる 232

さわやかな新十段 236

IV

幸運によつて手に入れた本 241

青春の日のバイブル 244

レクラム本 246

ゲーテ伝の人間の魅力 250

肉筆初稿グリム童話拝見 253

脱社会でない脱出——イタリア紀行 255

謙虚な自信の訳業 257

『泉に聴く』 260

『死と愛と』

262

V

花とねこ

267

筑波山のふもとで

269

京橋から武蔵野へ

271

ふくろの中のねこを買う

273

二つの読書会と私

276

秒読みとハプニング

280

ペン理事十八年

283

ペンクラブの役割

285

人さまさま

289

短気のいましめ

291

牧師と女性解放

292

凍れる音楽

294

我慢強い愛

295

若いママのエゴイズム

296

新年の詩

297

もっと誕生日の祝いを！

299

働き過ぎ談義

303

生きる勇氣

306

文学者の死生観

310

美と正義

315

いとおしむ

317

あとがき

319

ちまぢまの出会い

タカハスキー氏

私の名前は、姓も名もごくありふれているので、同姓同名の方が少なくない。終戦後の混乱期に、高橋健二という名前をかかけて銀座でサンドウィッチマンをしていた青年がいた。私は時々友人から、「今日、君を銀座で見たよ」と言ってからかわれた。また、数年前、やはり同姓同名の若い芸能人が、隠し女に訴えられたとかいう記事が週刊誌に大きく出て、騒がれたことがあった。私の同僚の一人は「高橋先生、ついにやったか」と歓声をあげたそうである。そのくらい派手なことをやったとすれば、私という男もまんざらでない、と自分でも思うのであるが、あいにくと同名異人であった。

高橋健自というスキーの大家がいた。私はスキーはいくらもやったことがないのに、いくどか放送局からスキーの話をしてほしい、と電話がかかった。いつそその人になりすまして、あることないことしゃべってやろうかと思つたことさえある。人ちがいして事を頼むなどとは失礼な話である。

私と同じ銀行に口座を持っている同姓同名の人がいたため、私の持たない株の配当金が私の口座に払い込まれたことが、いくどもある。まもなく取り消されるので、こちらは幻の入金にぬか

喜びをさせられたわけである。

外国でしばしば私はタカハスキーにされる。シの Shi が Shi と読まれてしまうからである。スキーという語尾はロシア名でストラヴィンスキー、ドストエフスキーなどといへん多い。ドイツ人にだって……スキー氏はたくさんいる。それでタカハスキーと思いこまれてしまうのである。外国旅行中そう呼ばれることがあるから、気をつけていなければならない。今回、私はナトホルスト国際翻訳賞を贈られることになったが、そのニュースに、タカハスキー（東京）が受賞者にきまった、とストックホルムの新聞に出た。タカハスキー氏はまもなくフランスのニースで行われる授賞式に赴くとのことである。

タカハスキーでは困るので、私はドイツでは「高い橋」と名のることがある。それと近いドイツ名があるそうである。英語ならハイブリッジ氏というところで、まことしやかに聞こえる。

私はそして、自分は日本とドイツとの文化を結ぶ高い橋である、と大げさに言ってみる。きまじめなドイツ人は大いに敬意を表してくれる。名ばかりでなく、実体もそれにふさわしくありたい、と私は願っている。

（一九七四年六月）

ヒトラーに毒をもらなかった女性

ヘレーネさんは立派な薬剤師なのに、糖尿病をわずらっている。ひとの病気をなおす薬はもるが、自分では薬を飲んでいないようである。彼女の薬局には三万種ぐらいの薬品があるとかだが、自分にきく薬だけはないと思っているかのようなのである。経営万端をあずかっている大きな薬局に並んでいるものは、なんでも知っているということだ。薬をあつかって四十余年で、薬剤師受験必携というような著書もある。

だが、どうやら薬剤師の不養生というところか、紅茶を砂糖なしで飲むくらいで、食餌療法をしているとも見えない。女だてらに八十キロ以上で、関取型のからだを持てあましているようだが、いたって陽気である。

彼女はミュンヒェンに長く暮らしており、ヒトラーを知っている。ヒトラーがミュンヒェンで一九二三年秋、革命さわぎに失敗してから、ナチスの再建に成功して大勢力をきざぎあげたところのことである。ヘレーネさんの蔵書の中に『詩に歌われたミュンヒェン』という本があったので、あけてみたら、斎藤茂吉の短歌のドイツ訳がのっていた。なるほど茂吉は一九二三年の夏から翌年春までミュンヒェンで研究している。「ミュンヒェン漫吟」の中に、

「一隊がハーケンクロイツの赤旗を立てつつゆきぬこの川上に」

「行進の歌ごゑきこゆヒトラーの演説すでに果てたるころか」

というような歌がある。

ヘレーネさんがヒトラーに薬をとどけたのは、それより少しあとである。薬剤師になりたてのヘレーネさんはいくどかヒトラーのための薬を調剤して使いに渡したり、とどけたりした。その時、彼女は、その気になればヒトラーを毒殺することは容易だと思ったそう。総統になったのちのヒトラーに対しては、もちろんそんなことは思いもよらなかったろうが、まだ無冠の闘士だったころなら、アスピリンの代りに毒を飲ませることは、さしてむずかしくはなかったろう。

ヘレーネさんは保守的で、新教徒にしては信心ぶかい方なので、ヒトラーのような過激なやり方はきらいだった。ヘレーネさんは、あちこちに華麗な宮殿を建てたのち発狂して死んだルートヴィヒ二世王が好きで、その造営になるノイシュヴァンシュタインの城にも、ヘレンヒーム湖の城にも、私を連れて行って、得々と説明してくれた。

そんなふうだから、彼女はヒトラーの暴走ぶりが我慢ならなくなって、毒をもってやろうかと思つたこともあつた。その機会はあつた。しかし、自分は薬剤師で、ひとの命を守る任務を課せられているのだという職業意識、あるいは使命感がそれをさえぎつた。

しかし、もしあの時、思ひきつてヒトラーを毒殺していたら、世界の惨禍を防止することができただろうに、と考えることが折り折りあるそうだ。もしあの時、その気になってそれがうまく

いったら歴史は大きく変っていたであろう。それこそ、クレオパトラの鼻がもう少し低かったらという仮定どころでなく、世界の顔はすっかり変ったにちがいない。

運命の恐ろしさを時々彼女は感じるようである。しかし、いつも陽気で、ミュンヒエンの音楽
寄席ブラッツルの常連である。私も三度おともした。民謡やヨーデルンや民族舞踊など、にぎやかな出し物があるが、呼び物は世相風刺の漫才である。バイエルンの方言でやるのが、ドイツ人や、お里がえりのアメリカドイツ人に喜ばれる。私がよくわからないでいると、ヘレーネさんが通訳してくれる。

「このごろの刑務所の施設をよくするのは、どういうわけか知ってるかい」

「世なおしが行なわれて、今の政治家が刑務所に入れられた時のためさ」

そういったぐあいだが、時として恐ろしく鋭い政治感覚を示すことがある。

「ベルリンの壁をソ連が高くさせたわけを知ってるかい？——フルシチョフ首相が西側に脱出しないためさ」

その漫才を聞いた数か月後、フルシチョフは失脚した。

ああいうしやれたドイツ語は私にはなかなかかむずかしい、と私が言ったら、ヘレーネさんは「一体あなたはこういう動機でドイツ語なんか勉強する気になったの？」とたずねたから、私は即座に「あなたに会いたいと思って」とやり返したら、老嬢は巨体をゆすぶって苦笑した。

先日ヘレーネさんが東京に来た時、東京ほどうえたいの知れないところはない、この混雑にはま

「まったくお手あげだ、と嘆声を發したので、私が「それじゃ、なぜ東京に來たの？」ときいたから、彼女は即座に「あなたに会いに」と答えた。老いた男女は屈託なく笑った。

(一九七一年二月)

ナポリのすりとチヨコレート

ナポリの中央駅でおりると、タクシーが案の定、二千リラとふっかけて來た。公認の黄色のタクシーだが、メートル無視である。荷物があるので他の車とかけ合うのもめんどうと、言いなりに乗る。サンタ・ルチア・ホテルは、海を距ててソレントとヴェズヴィオ火山が見渡せて、すばらしい。

中央駅に行こうと、近くにゐるタクシーにきくと、三千リラと言う。荷物が無いのに、ひどい値段だと思つたが、急ぐので、財布から薄汚い千リラ札を三枚出してみたが、近くを中央駅行きの電車が續いて走っているので、タクシーをやめて、それに乗った。たつた五十リラ(三十円弱)である。安い代り、ものすごい混雑で、電車の後ろにぶらさがっている人が二人もゐるのに驚いた。四十年前の東京なみである。電車の中で押されながら見ていると、ナポリには美人が多いと思つた。この前にも気づいたことだが、ここの女性は顔立ちがふつくらととのつており、目が大きい。こみ合っているから、美しい顔を人かげからじっくり見ていられる。安くて目の保養ま